
作者が45%壊れたときに書いた話

赤神幽霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者が45%壊れたときに書いた話

【Nコード】

N2151C

【作者名】

赤神幽霊

【あらすじ】

注意：タイトルと内容は一切関係がありません。これは、この世で兄妹が結婚できないのならばあの世で、と考えた兄が大好きな妹が、兄を殺そうとしたりしなかったりするお話。重ねて言いますが、タイトルと内容は（以下略

(前書き)

タイトルと内容を無関係にしてもよかったのでしょうか……。笑えるかどうかはわかりません。面白かったら笑ってください。面白くなかったら鼻で笑ってください。m | | m あれ？ 前にも同じようなことを……

朝七時。

みいなのは兄の部屋にそつと忍び込む。

足音を立てないように一歩一歩を慎重に運ぶ。

手には包丁。

仕方ないじゃない。

だって好きなんだもん。

殺したいくらい。

ねえお兄ちゃん。

あたしに殺されてよ。

私もすぐに死ぬからさ。

いいでしょ？

いいよね？

きやははっ

死んじゃえ

せえーのっ！

眠る兄の心臓目がけて思いっ切り包丁を振り降ろす。

「チエストオ!!!」

「あんっ!!!」

布団の中から放たれた蹴りが、みいなを捕らえた。

「あう……い、痛い……。お腹、痛いよお……」

みいなはお腹を抑えてうずくまる。

そして涙目で兄 かすや 和弥を睨む。

「お兄ちゃんひどいよう。みいなのお腹蹴るなんて」

「人を殺そうとしておいてよく言うな……。うっ、そんな目をして
もごまかされないからな!」

和弥は罪悪感を覚えた。

どうにも妹の涙目には弱いのだ。

「違うよ。起こしに来ただけだよ」

みいなが反論する。反論するのだが

「じゃあその手に持つているものはなんだ」

と、和弥はみいなの手にある包丁を指差す。

「えっ！ あれ？ なんてあたし包丁なんか持つてんの？！ あれ

ーおかしいなー。なんか勝手についてきちゃったみたい」

あははーとみいなはごまかすように笑った。

「見え透いた嘘をつくな」

「やっぱり……だめ？」

「あたりまえだっ！！ 大体、いつも起こしに来てくれるのはいいが、どうして毎回俺を殺そうとするんだ！ おちおち寝坊もできやしない」

「いいじゃない。おかげで毎日ちゃんと起きられるんだから。あつ、朝ご飯できてるから早くきてねー」

言い置きながら、そそくさと出ていった。

逃げやがった。

仕方なく和弥は支度をし、リビングへ向かった。

テーブルには既に朝食が並んでいた。コーヒーとトーストだ。

みいなはすでに席についていた。

「おはよう、お兄ちゃん」

制服姿のみいなが天使の笑顔で挨拶した。

「おはよう……」

和弥は嫌な予感がした。妹がこういう笑顔をするときは大抵何かを企んでいるのだ。

それも命にかかわることを。

自慢ではないが妹は可愛い。整った顔立ちに、さらさらとした艶やかな黒髪。その笑顔といたら、どんな男でも一発で落ちること間違いないだろう。

よく二人きりで間違いが起きないものだ。（両親は世界一周旅行中ではばらく帰ってきやがりません）。

みいなは家の家事一切をこなしていて、成績優秀、運動神経抜群、料理の腕も一級と、我ながら誇らしい。しかし、しかしだ。

「どうやらみいなは自分のことを好いてくれていたらしい。そのため色々と尽くしてくれている。それはいい。というかなんかうれしい。けれど、問題があった。」

彼女は、事あるごとに兄である自分を殺そうとするのだ。

彼女いわく『あまりに好き過ぎてもうどうしようもなくなつて、誰にも渡したくなくて、一人占めにしたけれど叶わなくて、妹だから結婚もできない。だからあの世だったらできるかなと思うから、お兄ちゃんを殺して私も一緒に死ねば、お兄ちゃんと結婚できるし二人で永遠に一緒に暮らせる』ということらしい。

根拠ゼロだ……。

おかげで今朝のような光景も、ほぼ毎日である。

みいなが使う得物は鉈だったり、包丁だったり、刀だったり、拳銃だったり、爆弾だったり、毒薬だったり、呪いだったり、黒魔術だったり、杖拳にいとまがない。

ん？ 最後のほうはもはや得物ですらないな。

「どうやってそれらを調達しているのか、未だ謎に包まれている。」

「今までよく生きてたよ、俺。」

果たして、目の前の朝食になにが仕掛けられているのやら。

「いや待てよ。もしかしたら電気椅子じゃないだろうな。」

和弥はみいなに、そして部屋に不審な痕跡がないかを観察してから席に着いた。

「電流はこない。」

「よかった。電気椅子じゃない。普通の椅子だ。」

「どうしてそんなにきよるきよると部屋を見ていたのかわからないけど、早く食べないと冷めちゃうよ。ささ、どーぞ」

「いまだニコニコ顔は続いている。」

みいなはいたただきますと、自分の分を食べ始めた。
和弥はパンの端っこを少し千切ると窓を開け、目で見える範囲に
投げた。

「あ、何するの！ うっ……」

和弥はそれをひとまず無視する。

雀が一羽飛んできて、パンの欠片を食べた。

……よかった。なんともないや。

今度はコーヒーを染み込ませた物を投げて与えてやる。

「なっ！」

案の定、雀は泡を吐いて痙攣し、やがて動かなくなった。

すまん名も知らぬ雀よ。

「みいなさん。このコーヒー飲んでくれませんか？」

「えっ！？ そんな……嫌なの？ せつかくお兄ちゃんのために用意したのに。ううグスン」

涙目で、さらには上目遣い。こいつ……うまくごまかしやがった。

「ぐあっ……」

またも罪悪感が込み上げてきた。

でも飲んじやだめだ。飲んだら逝ってしまう。

「正直に言え。一体何を入れた？」

「グスン……怒らない？」

涙声で訊かれる。

「怒らないから」

「……青酸カリ」

「んなもん入れるな……」

思わず叫んでしまった。

「怒らないって言ったのに……」

どこでそんなもの手に入れてくるんだコイツは。

犯罪の臭いがぶんぶんしてるぞ。

「今すぐ捨てなさい」

「飲まないの？」

「飲みません」

「飲んでよ」

「嫌だ」

「ええいさつさと飲まんか！」

でたな本性。

「殺す気か————！！！」

「うん」

うわ、笑顔で頷きやがった。

もう嫌だ。頭いてえ……。

「あ、もうこんな時間だ。早く学校行こうよ。お兄ちゃん」

「拳銃片手に言わないでええええええ！　　というかどこから?!」

「がんばって逃げてね？　　きゃはっ」

「ぎゃー！　　逝ってきまーす?!」

誰か、タスケテクダサイ……。

和弥　　すなわち俺は妹の銃撃を避けて登校し、なんとか午前中の授業を終えた俺は急いで教室から脱出しようとしていた。

来る。奴は必ずここへやって来る。だから先に逃げなければならぬ。なるべく人のいないところまで。巻き添えで犠牲者を出さないために。

だが

「お・に・い・ちゃん」

間・に・あ・い・ま・せ・ん・で・し・た。

「のおおおおおお！」

俺は躊躇いもなく窓から飛び出し、空中に身を躍らせた。

ちなみに俺のクラスは四階にある。なあに、死にはしないさ。

と、落下先に見覚えのある顔が……　　つてみいな!?

「お兄ちゃん。私の気持ち、やっとわかってくれたのね！」

落下予想地点でみいなが満面の笑みを浮かべて待ち構えていた。

「わーかりーましえー——ん」

俺が飛び降りるのを見たみいなは四階から校庭へ先回りしていやがったのだ。速いってレベルじゃない。まさに瞬間移動。物理法則は何をしている！

ああ。ご丁寧に槍なんか持ち出して、その矛先をこっちに向けてるよ。よく見たら反対側にも刃がついてるね。しかも自分の心臓のあたりに向けちゃってる。

やっぱり殺す気なんだね。そして、一緒に死ぬつもりなんだね。そうはいくかよ。

「おらあああああああ！」

校舎に沿うように備え付けてあるパイプを掴み、勢いを一旦殺して軌道を変える。

壁を蹴って一気に加速し、地面へ。突き出されてくる穂先を紙一重で見切り、かわす。着地すると同時に、全力で走って逃亡開始。すぐえぞ俺の身体能力。まぐれって素晴らしい。

「あーん。待ってよー」

甘えた声を出して追いかけてくる。

槍は適当に投げ捨てたようだ。

「一緒にお昼ご飯食べようよー」

立ち止まってやりたい。だがそういうわけにはいかない。まだ俺は死にたくない。

「てへへ。追いついちゃいましたー」

「うおっ！」

いつの間にかみいなは俺に並走していた。

「あたし、学校にいるときは狙わないよー？」

「信じられるかああああ」

俺は走るスピードを上げた。

「ホントだつてば。お兄ちゃんと一緒に食べようと思ってお弁当、作ってきたの！ 毒だつて入ってないからー！」

言いながら必死に追いつがってくる。

「じゃあさっきのはなんだー！ー！ー！」

「ほんの冗談のつもりだんだよう……。あやまるから。あたしあやまるから許してええつええつく……」

ほんの冗談でアレですか？

一気にみいなの姿が後ろに流れてゆく。

「あれ……………」

ゆっくりとスピードを落とし、立ち止まる。振り返って見ると、みいなのは制服が汚れるのも気にせずに地面にへたりこんで泣いていた。

「お、おい……………」

「うっ、ぐ……………ひつく……………」

「み、みいな……………」

「あた、あたし…………お兄ちゃんと、一緒に、お昼ご飯食べ、たかった……………だけなの…………。ごめんなさい。あんなことして、ごめんなさいあつ、い……………」

「ごめん。俺が悪かった。一緒に食べようか。な？」

よしよしと頭を撫でてやる。

その後二人で仲直りして一緒に弁当を食った。

たいへん美味かった。本当に毒は入っていなかった。

悪いことしちゃったな…………。

放課後

「妹よ。その手に持っているのは何かな？」

「あ、お兄ちゃん。待ってたんだよ？ というわけで一緒に帰れ」

もはや命令形だ…………。

「その前に質問に答えてね？」

そう。言葉よりも先に何とかしなければならぬものがあるのだ。

「えつとねえ…………レーザーガン？」

俺に光を避けると？ そしてそんなもん現代技術で民間人に流通させられるほど量産できるのか？ コスト考える馬鹿。つか技術的に無理では…………。

やっぱり“学校でだけ”なのね。襲わないの。登下校は含んでも
られないんだ。へえ、そつかあ……。

さらば、平和な時よ。

「無駄かもしれないが一応。そいつを今すぐ破棄しなさい!!」

「うふふ。わかつてる、く・せ・に」

そして向けられる未来兵器の銃口。

「いつくよー!!」

「いやああー……」

この日、俺は光速を超えた……。

俺は今、風呂に入っている。

なぜか妹は襲ってこない。別に奴は恥ずかしがっているわけでは
ない。こんなときくらいと遠慮している可能性ならあるが。

いつも思っていた。妹は俺を本気で殺そうとはしていないのでは
ないか と。

いくらでもチャンスはあったはずだ。だが俺はこうして無事でい
る。本当はどうおもっているんだろう……。

ガチャン!

突然開かれる浴室の扉。

「お兄ちゃん」

やってきたのはもちろん妹 みいなだ。

武器らしいものは持っていない。

でも、よくなかった。いや、よかった。ああ、やっぱりよくなく
なくていいのかも……。

体操着の上とスクール水着とはマニアックですな。うわー胸元窮
屈そう。まったく。すっかり女らしい体つきになっていらっしやる。

「お背中流しまーす」

みいなのは相変わらぬ笑顔で俺に向けていた。

俺の鼻の下が若干伸びてしまっているにもかかわらず。俺の視線
はさっきから顔、胸、腰を行ったり来たり……。

「……どういうつもり？」

動揺を押し殺して訊ねた。

「え？ お兄ちゃんこういう格好の女の子見てもなんとも思わないタイプ？」

「なあ妹よ。兄として言わせてもらえば、みつともないからヤメナサイ」

「えー嫌なの？ せっかく悩殺しようと思ったのに」

何で悩殺……。ああ、確かに書くときと殺って漢字あるね。でも意味がチガウ。

そう言っでここで脱ごうとする。

「ここで脱ぐなー！ー！ー！ー！」

「いいじゃない兄妹なんだし。もしかして恥ずかしいの？」

「うっ……！」

「凶星？ 凶星なんだね？」

「う、うるさい」

「あー照れてる。んじゃあこうすればどうかな？」

何をするつもりだ。

悪戯っぽく笑うみいなはいきなりシャワーを浴び始めた。

体操着の薄い生地が透けてその下の水着が見えた。なんだろう、実物は見えてもいないのにかえって……。やつべえなんかドキドキしてきた。落ち着け。落ち着くんだけ俺。相手は妹だぞ。

「ねえ……お兄ちゃん」

どうしたんだろう。急に声から元気がなくなった。

「な、なんだ？」

「あたしのこと……好き？」

「ど、どうしたんだよ突然」

「いいから答えて。和弥は、あたしのこと、一人の女の子として、好き？」

なんだなんだこの状況。

普段とは打って変わった真剣な眼差し。

「ここは正直に言った方がいいだろう。」

「……………好きだよ」

これで、少しはマシになってくれるだろうか。頼む、おお神よ。

『アオーーン』

狼じゃねえ！！ どっから湧いてきた！

なんだよまったく、雰囲気台無しだ！

え、隣の犬？ なんてタイミングだ。完璧じゃないか。

「ほんと？」

「ああ、ほんとだ」

「よかった」

「というと？」

「いつも酷いことばかりしてるから、嫌われてたらどうしようって思ってたの」

「だったら止めてくれ」

「それはできないよ」

この世に神はいなかった。

はあ、まだ続くのか……………。

とりあえず叫ぼう。うん、そうしよう。すう……………、

「フザケンナバカヤロー……………！」

「これからもがんばってね、お兄ちゃん きゃはははははは」

俺の叫びは、おそらく誰にも届かなかっただろう。そう、目の前にいるみいなにすら……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2151c/>

作者が45%壊れたときに書いた話

2010年10月8日15時29分発行